みんなの家とは建築を完成させることだけが目的ではなく、『みんなでつくる』という営みの中で、時間と場所を共有すること、その体験にこそ、価値があるのではないかと思い至りました。

（設計者）

増大する自然災害への対応

東日本大震災(2011)をきっかけに、熊本広域大水害(2012)、熊本地震(2016)、令和2年7月豪雨(2020)と度重なり発生する災害において、「みんなの家」は被災された方の憩いの場として活用されました。

みんなの家は、さまざまな年齢、視点、立場の違う人々が関わり作り上げられます。多くの目で見て考え、みんなが参加することは、ソフト面も含めた創造的復興の一つのシーンとなったと思います。

（設計者）

ボランティア活動の昼休みには、みんなの家やその前に配された広場で弁当を食べ、通りかかる住民さんとお喋りし、それが次の支援に繋がるようなことを何度も経験しました。

（学生ボランティア）

小さな コミュニティ 再生の場

「みんなの家」は被災地の仮設住宅などにおいて住民の方が集い、語り合い、ときには復興について話し合う、小さなコミュニティ再生の場として活用されました。

趣味のサークル活動を通じて生まれた付き合いが継続していたり、「みんなの家」で活動を行うときは、退去された方にも声をかけて一緒に参加されたり、地域の方も含めて使われることも多くありました。

（仮設団地見守り支援）

完成後のみんなの家を訪れると、建物内部で元気に遊んでいる子供たちや、将来の大事なことを輪になってみんなで話し合っている住民の姿を見て、これが鍵をかけない公共建築、いつでもみんなが自由に気軽に集まって使える我が家のリビングの延長のような家みたいな建物と思いました。

（設計者）

みんなで床に座って体操教室をしたり、歌手が歌を披露したり、夜は居酒屋になったり、おじいさんがふらっとカラオケしに立ち寄ったり、こどもが宿題をしたり、映画鑑賞をしたり、、、　人々が自然に集まってくる「たまり場」の様なものとしてみんなの家が使われていました。

（設計者）

新しいタイプの公共建築

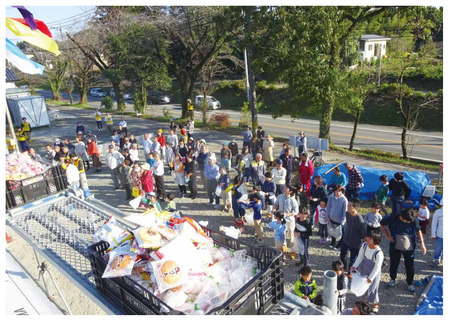
「みんなの家」は被災地での仮設的な集会所としてだけでなく、被災された方が生活再建された後も、地区の公民館やコミュニティ施設など、平時において地域住民が集まる場として活用されはじめています。

新しい敷地でみんなの家建設のための、縄が張られているのを見たときに、ここで公民館が再建できるという実感が沸いて、今でも忘れません。その時の喜びは鮮明に覚えています。材料を搬入されて、建て方の際にもうれしくてずっと見ていました。

（地区住民）

みんなの家の利活用により公民館を再建したという事実ももちろん大切ですが、そのために地域がみんなで話し合ったことに意味があった。被災した地域が今後のことについて話し合うので、みんな前向きになることにつながり、地域がリスタートするきっかけになったと思います。

（地区住民）



みんなの家が、場所を変えて人々の日常生活に再び身近になることで、自分の家とは別のもう一つの「共有の家」のような存在となるのではないか、そこには新しい暮らしのモデルの可能性があるのではないかと期待しています。

（設計者）

ここに入ると、窓から地区の風景が切り取られて、とてもよい空間になったと感じています。

（地区住民）